LIGHT HOUSE
ライトハウス
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘 1-16-13
TEL 03-3717-2711　FAX 03-3717-2721
http://www.lighthouse-jiyugaoka.jp　e-mail gospel@lighthouse-jiyugaoka.jp
郵便振替口座　00120-6-170857　みずほ銀行 渋谷支店 普通 2382850（ライトハウス）

C2021-09 世界は燃えている

[今月の聖書]

イザヤ　43:1.2.4.5

43:1 ヤコブよ、あなたを創造された主はこう言われる。イスラエルよ、あなたを造られた主はいまこう言われる、「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。43:2 あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共におる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。43:4 あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛するがゆえに、あなたの代りに人を与え、あなたの命の代りに民を与える。43:5 恐れるな、わたしはあなたと共におる。わたしは、あなたの子孫を東からこさせ、西からあなたを集める。

ルカ　12:49-51

12:49 わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか。
12:50 しかし、わたしには受けねばならないバプテスマがある。そして、それを受けてしまうまでは、わたしはどんなにか苦しい思いをすることであろう。12:51 あなたがたは、わたしが平和をこの地上にもたらすためにきたと思っているのか。あなたがたに言っておく。そうではない。むしろ分裂である。

マタイ　3:10-12

3:10 斧がすでに木の根もとに置かれている。だから、良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれるのだ。 3:11 わたしは悔改めのために、水でおまえたちにバプテスマを授けている。しかし、わたしのあとから来る人はわたしよりも力のあるかたで、わたしはそのくつをぬがせてあげる値うちもない。このかたは、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。
3:12 また、箕を手に持って、打ち場の麦をふるい分け、麦は倉に納め、からは消えない火で焼き捨てるであろう」。

ヤコブ　3:5-6

3:5 それと同じく、舌は小さな器官ではあるが、よく大言壮語する。見よ、ごく小さな火でも、非常に大きな森を燃やすではないか。
3:6 舌は火である。不義の世界である。舌は、わたしたちの器官の一つとしてそなえられたものであるが、全身を汚し、生存の車輪を燃やし、自らは地獄の火で焼かれる。

ユダ　21-23

21 神の愛の中に自らを保ち、永遠のいのちを目あてとして、わたしたちの主イエス・キリストのあわれみを待ち望みなさい。 22 疑いをいだく人々があれば、彼らをあわれみ、 23 火の中から引き出して救ってやりなさい。また、そのほかの人たちを、おそれの心をもってあわれみなさい。しかし、肉に汚れた者に対しては、その下着さえも忌みきらいなさい。

お元気でお過ごしでしょうか。今月は、「世界は燃えている」と題して神は聖書を通して現在の世界に何を語っておられるか、そして私たちの人生にどのような光を与えておられるかを考察してまいりたいと思います。1967 年 10 月に私が回心しました時、東京武道館で開かれたビリー・グラハム国際大会でビリー・グラハム師の説教を聞きました。13 年後、再びビリー・グラハム師が日本に来て 4 カ所で説教しましたが、東京と福岡でその通訳チームに入りました。その言葉だけではなく伝道の方法とスピリットに触れました。その後招かれて北米の大会の説教も聞きました。20世紀最大の伝道者と言われ、戦後世界に聖書を語る預言者としての働きをしたビリー・グラハム博士が何を語っていたのかということを今更のように省みている昨今です。

あの時代は日米安保条約問題やベトナム戦争の最中にありました。米ソ冷戦時代であり、戦後世界が激しく燃えている時でした。日本人の心も高度成長の中でよくも悪くも燃えている時でした。さて今はコロナ問題で全世界が揺れています。経済面だけとれば世界戦争にまさる落ち込みと言われています。人々の心の中に不安と恐怖が満ち、無気力と空虚の雲が覆っていると言われます。それでは今聖書は私たちに何を語っているのでしょうか。ビリー・グラハム師が1966年に出版した「世界は燃えている」からいくつかのヒントをいただいてこのメッセージをお伝えいたします。あなたの人生の指針となりますようにお祈りしています。

小田 彰

(お知らせ)
9月から地区集会再開を願っておりましたが、現状を見る限り困難と思われますので、もう少し休会といたします。皆様との再会を待ち望んで祈っております。

◇◆◇ ＣＦＩ会員投稿原稿　第 79 回 ◇◆◇

「生と死の狭間に立って」

小泉　忠弘（埼玉県）

医学部の学生時代に、生化学のある教授の特別講義を聞いた時以来、宇宙及び自然界を創造された神の存在を漠然と信じるようになりました。

大学の医局に入り、2 年目に、脳出血で倒れて昏睡状態にある入院患者を受け持った時、入院後二十日間以上過ぎても昏睡が続き、意識の改善が見られず、医療の限界を感じました。また同時に、周囲の人々や患者の家族の方々のほとんどが病状の改善、回復は困難であるとあきらめかけていたようです。この時、私は初めて祈ることを覚えました。私は自己の存在を投げ出して、神様に全てを委ねるような気持ちで、患者の病状の改善と私の医療行為が支持されるようにと、熱心に祈りながら、毎日点滴注射や処置に明け暮れました。

その後、約 10 日目に、すなわち約 1 ヵ月間の昏睡状態が続いた後に、患者は奇跡的に意識を回復しました。教授を始め多くの人が、私の努力を称賛してくれましたが、私はこの時神の存在を身近に感じ、感謝の念に満たされていたことを覚えています。それ以来、26、 7 年の年月を経る間に、極めて重大な事態に至ったときに限り、私はこの祈りを行ってきました。

妻は 20 年前受洗しキリスト者となり、三男も約一年前に受洗しました。大学の医局時代には、カトリックの神父さんと仕事(医療)のことで付き合いがあり、内科医院を開業して以来、近隣の教会の牧師さんとの交際など、周囲の環境の影響もあり、私は 2 年ほど前から主の祈りを暗唱するようになりました。

最近ある問題についての心の悩み、すなわち自己に内在する解決困難な問題に直面し、聖書を読んでみようと思い立ち、自分から教会の門を叩きました。牧師さんから借りた数冊の本の中に、次のような御言葉がありました。

「しかし、私たちは、この宝を土の器の中に持っている。」（第二コリント 4: 7）

人はいくら自分を高めてみても、土の器に過ぎない。しかしその土の器に神の光を注いで、神の光で満たしなさい、と解説してあったと思います。私は自分のことを指摘されたように思いました。その後、東神大パンフレットの中の使徒信条の解説書を読み、主イエスによる父なる神様との和解と、罪の赦しを理解し、キリスト者としての受洗を心に決めました。受洗後は困難な問題も次第に解決の方向に向かいつつあります。

なお、洗礼を受けた当日の夜、8 時ごろ、十余年にわたり診療をしていた患者の家族から往診の依頼を受け、すぐに駆けつけたところ、心筋梗塞を起こし、呼吸困難な状態となっていました。緊急入院の手配をし、救急車を依頼しました。私が最初に見たときには意識もはっきりして、「苦しい」と言っていましたが、まもなく心室細動を起こし、私の見守る中で呼吸停止、心拍停止にいたりました。私の医術ではどうすることもできなかった 83 歳の老人の生から死への移行でした。私は「父なる神様」と言って祈りました。現実にある神の御業は、時には残酷に見えることがあります。しかしこの患者さんの場合は、死の数分前から意識がなくなり、おそらく一切の苦しみから解放されていたと思われます。

イエスキリストの恵みに感謝いたします。

1993 年 3 月 11 日の受洗を記念して。

☆本文は 28 年前、私が小泉先生に授洗の司式をさせていただいた直後に書かれた証文ですが、今日医療の現場が逼迫して、医療従事者が奮闘している最中にあって、大変深い示唆に満ちた言葉であると感じます。小泉先生は医院を息子さんに譲られましたが、なお現役で医療の現場に立っておられます。　小田彰